

「さつきは、ごめんね」

雷かみなりが「ぴかあつ」と光ひかりを放はなつた日ひ、まなちやんが産うまれました。

むし暑あつい七月しちがつの朝あさのことです。

「おめでとう。お姉ねえちゃんだね。」

みんなに祝しゅく福ふくされ、三歳さんさいのふうちやんは嬉うれしくて、覚おぼえたばかりのスキップを披ひろ露うします。

たずねて来きた人ひとは、真まっ先さきにまなちやんを抱だっこしたが、何なん度もくり返かえしま

なちやんの名前なまえを呼ぶよのでした。

ふうちゃんは家いえの近くちかの公園こうえんで、すべり台だいをすべります。

一緒いっしょに来たおばあちゃんきは、がじゅまるの木陰こかげのベンチこしに腰かけて、パッチワークきをしています。

平日へいじつの午前中ごぜんちゆう、公園こうえんは静しずかで、見渡みわたしても水飲みずのみ場ばちか近くしんぶんのあずまやに、新聞しんぶんをよ読んでいるおじいさんが、ぽつんと一人ひとりいるだけなのです。

「つまらないの……。」

つぶやいたふうちゃんの目めに、電車でんしゃの遊具ゆうぐの陰かげの砂場すなばで、一人ひとり、遊あそんでいる男おとこ

の子の姿が目に留まりました。

ふうちゃんが近づいても、男の子は大きな砂山を作るのに夢中です。

砂の上には、黄色いシヨベルカー、緑のスコップ、赤いバケツ、紙コップな

どが楽しそうにとっ散らかっています。

ふうちゃんはそろっと、緑のスコップに触れてみました。

男の子は手を止め、ちらりとふうちゃんを見ましたが、何も言わずに、ぞうり

の裏側で砂山の山肌をぺたぺたならし続けます。

ふうちゃんも緑のスコップで穴を掘ります。

ふうちゃんが黄色いシヨベルカーに手を伸ばした時、男の子が立ち上がり、  
「これは、ダメツ。」

と、ふうちゃんの手から黄色いシヨベルカーを取り上げました。

「これと……これは、いいよ。」

男の子は緑のスコップと、紙コップをふうちゃんの足下に置くと、黄色いシ

ヨベルカーを大事そうに抱え、砂山の近くにこそつと下ろし誇らし気にスイッチ  
を押しました。

「ペロペロペロ。」と軽やかな音楽が鳴り「ガー、ガー。」と工事の音が響くと、

黄色きいろいシヨベルカーが動きうごきました。

ふうちゃんが近ちかづくくと、

「ダメッ。」

男おとこの子はすばやく、スイッチを切きってしまいました。

「いじわるね。」

ふうちゃんは、ふうちゃんより頭あたまひとつ大おおきい男おとこの子と、砂山すなやまを挟はさみならみ

合あいます。

ふうちゃんは大おおきく右足みぎあしを上げると、

ぐっしやり。

すなやま ふ  
砂山を踏みつぶしました。

ふうちゃんの砂まみれのぞうりの上に、少し湿気でぬくい砂山のトンネルが、

どどつとくずれ落ち、赤いバケツが転げます。

「うわあん、うわあん。」

泣きながら男の子は、ふうちゃんに砂を投げつけます。男の子の砂だらけの

頬に涙の筋ができるのを眺めながら（弱虫ねっ、泣きたいのはふうちゃんなの

よっ。）とふうちゃんは唇をかみしめました。

「あらっ、あら。」

おばあちゃんがやって来きました。

新聞しんぶんを讀よんでいたおじいさんも小走こばしりにやきって来きて、泣なきながら砂すなを投なげつけ

ている男おとこの子こに、

「太たい一いち！ やめなさい！」

と言いうと、おじいさんはふうちゃんに、

「ごめんね。」

と謝あやまりました。

公園こうえんからの帰り道かえ みち、太一君たいちくんの泣き声な ごえが後あとを追いかえるように、いつまでも、ふうちゃんの背中せなかに聞こえていました。

庭先にわさきにしゃがみ込みこ、ふうちゃんはアリをみています。濃い緑こ みどりの葉はからのぞくクチナシの白い花しろ はなの下したです。小さくて真つ黒ちい ま くらなアリの行列ぎょうれつが、大きなバツタおお おおの足あしを巣穴すあなに運はこんでいるのです。「よいしょつ、よいしょつ。」という掛け声か ごえまで聞こえてきそうです。

ふうちゃんが立ち上た あがって見下み おろすと、小さなアリちいたちの姿すがたは消え去き さり、バツ

夕の足が、つつつとひとりでに動いているように見えます。

「うっわあー。」

その様子をお母さんにも見せたくて、パタパタとぞうりの音を立て、蚊取線香が

たかれたぬれ縁から身をのり出すと、「ちゅぱっ、ちゅぱっ。」まなちゃんが、おっ

ぱいを飲む音が聞こえます。

そして、まなちゃんに優しくささやくお母さんのくぐもった声も……。

ふうちゃんはそっとぬれ縁から降りて、アリの巣穴の所に戻りました。

「ミーン、ミン、ミン。」小休止していたクマゼミが、また鳴きだします。

むぎ ぼうし なか あせ まえがみ  
麦わら帽子の中は汗だらけ、前髪がおでこにべっとり張り付き、ぷちぷちでき  
かけのアセモが、クマゼミの鳴き声なごえにあおられるように、わしやわしやかゆくな  
つてくるのです。

とつぜん あし も あ  
ふうちゃんは突然、バツタの足を持ち上げると、ぺっと遠くに投げ捨てました。

い い  
アリたちが、わらわらあちらへ行ったりこちらへ行ったりするのを、意地悪な

きも なが えん あ とつ  
気持ちでしばらく眺めると、ぬれ縁に上がり、お父さんのようにあぐらをかき、

ぼうし と  
帽子を取りました。

かせ かみ  
ふんわつと風がゆれ、髪をなでます。

ごろんと寝転ぶと、まつ青な空にぽっかり白い、綿菓子のような雲が見えま  
した。

ワンピースの裾をいじくり、縫い目をなぞります。黄色の小花模様のワンピース。  
お母さんが縫ってくれました。生地を選んだのはふうちゃんです。

その時まだ、まなちゃんは産まれていなくて、お母さんと二人買い物  
した後、ケーキ屋さんに入って、ふうちゃんはシュークリームとミルクココアを、

お母さんはチーズケーキと……。

目を開けると、まなちゃんの顔がありました。ふうちゃんが赤ちゃんのころ使っていた、青地にアサガオ柄の蚊帳の中です。

まなちゃんは手をぐうにして、小さな顔で口を少しあけて寝ています。時々、額にしわを寄せたり、にやりと笑ったりします。

ふうちゃんはぎゅうと握ったままの小さな指をそつと一本、一本開いてみました。細かい綿ぼこりのような物がついていて、つまんでみるとそれは湿っています、くんくんかいでみると、甘酸っぱい匂いです。

「ふうちゃん……起きたの？」

振り向くと蚊帳の外からおばあちゃんが、うちわでパタパタ、風を送ってくれているのでした。

ちりりーん。

おばあちゃんは風鈴をあおぎ、

「いい音だねえ、ふうちゃんおなか空いたでしょう？ 冷やそうめん食べようか。」

と、蚊帳をそっと持ち上げてくれました。

おばあちゃん、お母さん、ふうちゃん。三人で大好きな刻みねぎをたっぷり入れ

て「ちゆるちゆる……。」と、そうめんの音。

まなちゃんは蚊帳かやの中で、バンザイをして寝ねています。

「ふうちゃん、おいで。」

昼食ちゆうしよくの後片付けあとかたづが終わったお母さんおが、ふうちゃんの髪かみをとかして、結び直むすしてくれました。なお

ふうちゃんはおばあちゃんと、近所きんじよのスーパーマーケットいに行きました。

お魚さかなコーナーみずで、あさりが水をぴゅーと吐き出すのを見みていると、朝あさ、公園こうえんの砂場すなばであつた男の子おとこ、太一君たいちくんがやって来きました。

赤ちゃんあかを抱だっこしたお母さんかあと一緒にいっしょです。

太一君はふうちゃんに気づくと立ち止まり、ふうちゃんをじいつと見ています。

ふうちゃんは、べろーんと身をのり出すたくさんのあさりの中へ指を突っ込

んで、知らない振りをしていましたが、思い切って顔を上げ、太一君と向き合い、

「さつきは、ごめんね。」

と謝りました。

太一君が一生懸命作っていた砂山を踏んづけて、壊してしまったことを、ふ

うちちゃんはずっと悪かったと思っていたのです。

太一君は、ぱあーっつと笑顔になり、

「いいよつ、明日、一緒に遊ぼうね。」

と言いました。

ちやぶ台の上に新聞紙を広げて、おばあちゃんとふうちゃんは、もやしの根つ

と取り。

ふちつ、ふちつ。

爪の先つぽは緑の匂い。

「明日、公園に砂場セット持って行こうね。」

ふうちゃんはおばあちゃんに言いました。

お母さんがまなちゃんをお風呂に入れるのを眺めていると、お父さんが帰ってきました。

「ふうちゃん、花火だよ。」

抱きついたふうちゃんに、お父さんは後ろに隠し持っていた花火セットを見せました。

夕食の後、ふうちゃんはぶどうを一粒持ち庭に出ました。

アリの巣穴の前でぶどうの皮をむきます。指がべとつきます。果汁が足の親指

に、ぽとつ、と落ちます。

皮をむいてぼこぼこになったぶどうを、アリの巣穴の前に置き、

「アリさん、さつきはごめんね。」

と謝りました。

ふうちゃんの周りをクチナシの香りが、優しく漂っているのです。

(島尻 勤子)